

部会をとことんご利用下さい 再び

2020-2021 年度バックエンド部会長

杉山大輔

原子力発電の活用に関する記事や報道を見かけることが増えてきた。2011 年以降の国内原子力発電所の再稼働は依然として低調であるが、2050 年カーボンニュートラルへ向けた脱炭素化に資する観点から、また、エネルギー安全保障の観点から（最近にわかに注目されるきっかけには心が痛むが）、原子力発電への再評価が広がっているということであろう。振り返ってみれば、安定供給・経済性・環境に安全性を加えた「S+3E」を基本とするエネルギー政策の中で、原子力は、電源のベストミックス構築を支える技術として位置付けられていた。その存在と価値は、時代の状況に応じて「S+3E」の重心は動くものの、当面不変と言えるのではないか。そして、バックエンドの技術は、原子力発電の活用を支える不可欠の要素である。また逆にバックエンドから見れば、原子力発電の再評価は、放射性廃棄物の処理処分を進めることでもたらされるベネフィットへの認識を高めるものである。このような中で、バックエンド分野の研究の進展について、原子力関係者のコミュニティには当然として、さらに広く社会に発信し、共有していくような活動がますます求められていると思う。

さて、年 2 回発行の部会誌のうち、1 号の巻頭言は、前年度の部会長が執筆する慣例となっています。このため、私の巻頭言は昨年に続き 2 回目となります。本来ならば格調ある文章を書き起こすべきですが、昨年の随筆もどきに続き、今回も任期を終えての気持ちを取り留めもなくお話ししますこと、どうぞご海容願います（第一段落はせめてもの頑張りを見ていただければ幸いです）。

2020 年度、2021 年度のバックエンド部会の活動は、コロナ禍にあって、すべてオンラインで実施しました。異例ながら 2 か年にわたり部会長を務めさせていただいたのは、部会のオンライン活動を軌道に乗せるまでは体制の継続が効果的と考えてのことでした。部会員各位の前向きかつ多大なご協力と、運営小委員会メンバーの工夫と尽力によって、オンライン講演会形式はもちろん、ブレイクアウト機能を用いた議論や、バーチャル施設見学の実績も重ねてきました。当初は部会活動の維持が目標でしたが、画面を通すことによる参加の気軽さや、移動に掛かる時間や費用の削減の効果もあり、新しい活動様式としての定着までは達成できたかと思っています。

先日、日本原子力学会 2022 年秋の大会について、対面開催で実施準備が進められることとなりました。いよいよです。部会活動も徐々に対面活動を再開していくことになると思います。しかしながら、単に以前の対面活動に戻るのではなく、これからの部会活動は、この 2 か年の経験を活かした、さらに新たな姿に進んでいくべきでしょう。対面とオンラインの組み合わせ、使い分けによって、入り口は広く、奥行きは深く、専門分野・世代・組織等のちがいを超えて、双方向の議論が空間的に自由に拡がっていく部会活動。心が躍ります。

部会長を退任してからのお願いにはなりますが、ぜひ、新たな姿の部会をご利用いただきたいと思います。部会員各位の情報発信、共有、議論のプラットフォームは、使うことによってより便利で実効的なものとなっていきます。バックエンド部会の活性が高まれば、原子力コミュニティ、そして社会へ、我々の情報や意見を発信していくための大きな力になるでしょう。

約四半世紀前、放射性廃棄物連絡会から放射性廃棄物部会を経てバックエンド部会となった頃の部会誌に、「部会をとことんご利用ください」との巻頭言がありました。それから約 5 年後に「バックエンド部会の活用を」、さらに約 11 年後に「部会誌『原子力バックエンド研究』の活用を」との巻頭言がありました。加えて 7 年がたって、今一度、新たな姿の部会のご利用をお願いします。まずは各活動にご参加ください。さらに新たな部会をつくっていきましょう。

(2022 年 5 月)